女神のティア

詠城カンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女神のティア

【Ｎコード】
Ｎ７５１２Ｍ

【作者名】
詠城カンナ

【あらすじ】
「僕と契約しようよ？」――旅人の風体をしていたからだろうか。なんの気まぐれかしらないが、アジェは檻に入れられている少年に声をかけられた。「願いを叶えてやるよ」不敵に笑む少年――彼は、人間ではないイキモノだった……。

―契約―（前書き）

ついつい、妄想が勢いづいて書いてしまいました笑

タイトルは一応、仮で。
後で変更するかもしれません。
終わりを二通り考えてまして、また話の傾向も少女向けにするか少年向けにするか、二通り考えてまして、どちらにするかはまだ未定です。＾＾
どちらにしろ、少しでもお楽しみいただけるよう頑張ります。
不定期更新になるかと思いますが、お付き合いくだされば幸いです。

では、どうぞ。

―契約―

◆旅人と少年◆

―契約―

「おにーさん」
鈴の音のような声がした。思わず足を止めて聞き惚れてしまうほど、軽やかで澄んだ声だ。
「おにーさん、僕のこと、買わない？」
声はまた言った。静かな深森に響く、小さなうつくしい鈴のように――そしてそれは、どこか艶やかに。
アジェはようやっと自分に言われているのだと気づき、足をとめた。見れば、錆びかけた鉄の檻に、ひとりの少年がにこにこしながら入っている。十三、四歳くらいだろうか。手には厚い手錠をかけられ、首には赤茶色の首輪をされて鎖に繋がれていた。
「ね、僕、なかなか綺麗な顔してるでしょ？　買ってよ」
少年はあまえるように小首を傾げて言う。その愛らしい唇が語る誘惑に、アジェは顔をしかめた。
そう、少年はとても魅力的だった。
ほっそりとした身体。どこまでも深い漆黒の髪に、それとは対照的な透き通る白い肌。唇は薄い紅色で、少年ながらもどこか艶やかな雰囲気を醸し出している。なにより人を引き付けるのは、その瞳なのかもしれない……。琥珀色をした瞳は、強い光をもってらんと輝いていた。
アジェはふっと軽く息をはくと、檻の隙間から手を入れて、少年

の汚れた頬をごしごしと擦ってやる。今はうつくしい黒髪もボサボサに肩まで伸び、ボロボロの衣服をどうにか身にまとっている状態ではあるが、きれいに洗ってやればずっと秀麗になるはずだ。
しかし……とアジェは思う。この少年は今の状態でさえうつくしい。いや、むしろ、着飾らないほうが映えるのかもしれない。
「おにーさん、旅の人でしょ」
少年はうれしそうに笑う。
たしかにそうだった。アジェは深緋のマントを着込み、重たい荷袋を肩にかけ、腰には護身用の剣をさしている。まさに今、この深い森を夜までには抜けようと、足をはやめて進んでいる最中であった。
「ねえ、おにーさん。本当は僕、すっごく高いんだ。有能だしね。だけど、今悪い奴らに捕まって逃げられないんだよね」
べっ、と舌を出し、少年は首輪を指して肩をすくめる。
「この首輪、《獣人殺し》の薬が入ってるんだ。だから力が出せないんだよね～」
「獣人？　種は？」
アジェは思わず尋ねていた。少年はふいに口の端に高慢知己な笑みを浮かべる。
「――孤獣（コジュウ）」
孤獣――獣人種のなかで、もっとも珍しい最強の種。この国では人間のほかに、獣人という思考を持った生き物がいた。彼らは獣顔負けの能力を持ち、人も舌をまくほどずる賢い。高い知能をもった動物だ。
しかし、当然世界の支配者たる人間は彼らの存在を恐れた。《獣人殺し》と呼ばれる薬を開発し、それを服用させたり接触させることにより、彼らの強大な力を封じることに成功した。獣人には地位はない。奴隷や観賞用として人間たちに飼われることが主になりつ

つあった。
　しかし、何故よりによって伝説の獣人種・孤獣が捕まっているのだろう？　アジェは少年が逃げたいがために嘘をついているのだろうと考えた。それに、「買って」だなんて信用できない。檻から出した途端、彼に殺されないとも限らない。
　しかしそのとき、アジェの心を読んだかのように、少年が口をひらいた。
「よく見てよ。その紋章！」
　少年が示しているのは、檻をのせた荷馬車に描かれたマークだ。両翼で王冠を抱いた鳥が、水色で描かれている。
「王家……？」
「そ。王直属の獣人ハンターによってたかって襲われちった」
　アジェのつぶやきに、少年は黒髪をかきあげて「ついてないよねぇ」とこぼす。
　きょろきょろと辺りを見回し、見張りを捜してみたが見当たらない。アジェは頭を捻った。普通、こういう強大な力を持った獣人を野放しにはしないのではないか。
　そんなアジェの考えにもお構いなしに、少年はおもしろそうに笑ってつづけた。
「でね、僕、あんまりにも理不尽で頭にキちゃったから……王様、殺したの」
　くすっと妖艶な笑みを消さず、少年は琥珀色の瞳をいたずらっぽく揺らす。
「《獣人殺し》だって、孤獣が本気を出せばあってないが如し。僕を捕まえてご機嫌な王様にムカムカしてきてさ。思わず、呪ってやったんだ……」
　つまり、王が呪い殺され、指揮する人間も動揺し、この獣人を恐れ、みな逃げ出した……そういうわけだ。
　楽しそうに声をあげる少年。しかし、次の瞬間にはその愛らしい唇を尖らせた。

「でもぉ。そのお陰でこの様。あんまり頭に血が上ってたから、呪いの代償のこと考えなかったんだ」
「代償？」
「そ。僕、すっかり疲れちゃったから、人の生気吸わないと、もう力出せないんだよね～。あーあ。力使い果たすまえに、この首輪壊しちゃえばよかった」
あーあ、とうなだれる姿は、まるで幼い子供のようだ。この少年が人の命を奪ったなんて、信じられる人間はいないのではないか。
「おにーさん、買ってよ。僕と契約しようよ……大丈夫。僕、裏切らないよ？」
アジェは少年の琥珀色の瞳を見つめた。
生まれて十八年、こんなにうつくしいと思えるものに、果たして自分は出会ったことがあるだろうか。
「おにーさんの目、きれいだね。それ、何色？」
「……コバルトブルー」
琥珀色の瞳は妖しく笑う。
「いいね。それで髪はダークグレーでしょ？　……うん、すっごくイイ」
なにがいいのかわからない。しかし、アジェは少年の笑みを見れただけで、なにか埋まるような錯覚を覚えた。そう、この心の穴を埋めてくれるような――。
途端、アジェはふっと笑った。

「――！」
驚きに目を見開く少年。それはそうだろう。アジェは笑ったかと思うと、いきなり右手をさっと横に振り、それだけで檻を壊してしまったのだから。
ガラガラと崩れる檻から少年が出る。アジェは近づくと、指を捻っただけでその首輪を外してしまった。
「契約などいらないよ」

いまだ驚きを隠せずにいる少年に、アジェは無表情のまま言葉を落とす。
「わたしが欲しいのは悲しみだ。おまえにそれが叶えられるとは思えない――去れ」
今度は呆然とする少年を残し、アジェはすたすたと歩きはじめる。その顔にはもはや、笑みも歪みもなにもない。
少年はその、颯爽と歩く後ろ姿を見つめる。すらりと背が高く、長いマントが揺れるたびに、肩にかかったダークグレーの細い髪もゆらゆらと揺れる。鼻筋は通り、眉はきりりとし、凛とした端正な顔立ちをしていた。きっと明るく笑えば屈託のない笑みが見れるのだろう。
だがしかし、その旅人の眼には暗い影がひそみ、けれどどこか光を欲しているように見えた――だから、彼は声をかけたのだ。
「本気……？」
少年はぽつりとつぶやく。その口にはすでに、呆然とする色はない。ただ妖しく、心底愉快そうな笑みを広げるだけだ。
ニッと口角をあげると、少年は旅人に向かって走り出した。
「おっにぃっさーん！」
そうして、思いきり彼の背に飛び込もうとした。何事かと振り返ったアジェは、自分に向かって飛び込んでくる少年に唖然とする。あまりの勢いに、ふたりはそのままバランスを崩して倒れ込んでしまった。
「……痛ぅ」
「あれっ」
顔を思いきりしかめるアジェに対し、少年はきょとんと首を傾げる。アジェに馬乗りになっている形の彼は、そのまま無遠慮にも下敷きにしている人間の身体をぺたぺたと触り出した。
「あれれっ」
「……なに」
「まさか～！　もしかして、おねーさん？」

少年は旅人のマントの上から丹念に胸の存在を確認すると、びっくりしたように目を見開いて聞いた。
アジェは深くため息をはく。
「そうだけど……それがなにか――ッ！」
今度はアジェが目を見開く番だった。あろうことか少年は、喋っていた途中のアジェの唇を、自らの柔らかい唇で塞いだのだ。
「～ンぅッ！」
そのうち、身体から力が抜けていく。頭はぼうっとし、目はとろんとする。足の先から指先まで痺れてくる。呼吸も荒い。
まさか、これは――

意識を手放しそうになったそのとき、ようやく少年は唇を解放した。
「ごちそうさま」
額をくっつけながら、彼は上機嫌でにっこりと笑う。
アジェはまだ力の入らないダルい身体に鞭をうち、少年を押しのけ、上半身を起こして言った。
「……せ、生気を吸ったな……？」
「もちろん」
ふふ、と笑いながら、少年はアジェの頬に指を滑らせる。
「男の人とのチューには抵抗あったからさ。自由になったら殺して心臓まるごと喰べちゃおうと思ったんだけど～」
少年の手が、アジェの心臓のあたりをうろつく。
「でも、なんか変なこと言うし。まぁいいやと思って、おにーさんとチューする決心したんだけどなあ」
アジェの顎に手をかけ、「おねーさんだったんだね」と彼は不敵に笑う。
「僕、ついうれしくって、止まらなかったぁ。ごめんね」
「ふざけるな」
少年の手を払い、アジェは声をあげる。けれどそんな彼女の顔に

すら、怒りの表情はなく、無に近い。
「わたしの邪魔をするなら、わたしは――」
「まあまあ。契約しましょうよ、おねーさん」
いたって余裕の笑みで少年はつづける。アジェのダークグレーの髪に軽くキスを落として。
「僕の名前はエダ。貴女に素敵な悲しみを贈りましょう」

【1】

◇王女と王子◇

（1）

こんがり焼けたトーストを口いっぱいに頬張りながら、彼は「おかわり」と完食した皿を亭主に差し出す。つづいてカゴにのった林檎を引っつかむと、愛くるしい笑顔をふりまいてかぶりついた。

「おいし〜！　久々に生きてるって気がする」

亭主は半ば呆然としながら少年から皿を受け取り、本日五度目のおかわりに料理を盛りつけてやった。

ここは裏通りの酒場だ。普段は廃れかけた場所独特の雰囲気がある。表通りは華やかに活気づいているが、裏通りでは人相の悪い連中が、見た目を裏切らない働きをしてくれるおかげで、一般の人間は寄り付かなくなっている。

ここへ来るのは、表に顔を出せない人間などのワケアリな連中で、子供などが来ていい場所ではなかった。だいたい、ここは酒場だ。成人前の子供がひとりでいていいはずはない。

もちろん亭主だってそれくらいは知っている。しかし少年がひとりで店に入ってきたとき、彼は驚きすぎて注意をするのを忘れてしまったのだ。

それにしても、少年は愛くるしい容姿をしている。髪はボサボサだが、櫛を通せばさらりとして艶が出るにちがいないし、肌は陶器のようになめらかだ。「ぷはっ」とワインを飲み干し、幸せそうにほほえむ様は、まさに天使――

「――！　ちょ、ちょっとお客さん！」

亭主はあわてて妄想をやめ、少年に声をあげた。
「あ、あんたまだ未成年だろ?！　ワインなんて飲んじゃいけねーよ！」
すると少年は一瞬きょとんとしたが、すぐに怪訝な顔をつくって口をひらく。
「年でいえば、僕だってもう成人に等しいんだから。馬鹿にしないでよね。それに、ワインをくれたのはおじさんじゃない」
亭主はハッとする。ここは酒場だ。「飲み物ちょうだい」と言われても、酒しかない。どうやら自分は少年を見つめすぎて、気づかぬうちにワインを渡してしまったらしい。
はぁ、と彼はため息をこぼし、少年に言った。
「まぁ今回はいい。俺のミスだ……が。金はあるんだろーな?　そのワイン、特上なんだぜ。それにあんた、食い過ぎだろ」
頬をぷーっと膨らませ、少年は丸々した目をまたたく。
「知らなーい。そのうち来ると思うから、連れに聞いてよぉ」
言うや否や、彼は再び食事に戻る。いったいこの華奢な身体のどこに、こんな大量な食べ物を流し込めるのだろうと、訝らずにはいられないほどだ。
亭主は尽きないため息をこぼす。
と、そのとき、入口のベルが鳴り、新たな客の来訪を告げる。今度はちゃんとした客だ。三人のいかつい顔をした男たちであった。
「よお。久しぶりじゃねぇか」
亭主が声をかけると、客のひとりが太い眉をあげて応じる。
「ああ。ちょいと仕事ができてよお。今日は金が余ってんだ。たくさん飲んでくぜ」
「それにしても、外はえらい騒ぎだ。おやっさん、知ってるか?」
「おかげでこの裏通りにも監修の目が入りそうだぜ」
もうふたりの客も話に加わり、それぞれカウンターの席につく。
「ああ、知っているとも。例の事件だろ。ここいらじゃ、専ら話のネタはそれに尽きないがね」

「そうそう。アリス王女が城から逃げ出したんだろ？」
「金持ちの考えることはわかんねぇな……おい、あの客はなんだ？」
「お城が退屈で逃げ出したんじゃねぇか？　……それにしても、美人だな。まだガキか？」
「きっとそうだろ。そのせいで、城からの捜索兵がこの辺りをうろつくようになるのも時間の問題さ……チッ。男か。女だったら抱いてやったのによお」
　客らが少年の存在に気づき、いやらしい笑みを浮かべはじめたのを見て、亭主は深いため息をこぼす。そう、あの少年はきれいすぎだ。なにか問題が起こるのではないかと、かすかな不安がよぎる。
「おい、お客さんよお。頼むから、そういうのは店の外でやってくれよ」
「まあまあ。わかってるって」
　亭主の出した酒をぐいと喉に通し、男たちは満足そうな笑みをもらす。
「なあ、もしアリス王女を見つけたら、なにか謝礼金みたいなもんはくるのかな？　……それにしてもよく食うな、あのガキ」
「あったりめぇだ！　一生働かなくていいだろうぜ……でも、男のくせに色っぽいな」
「いらっしゃい」
　また店のベルが鳴ったので、亭主は入ってきた客に言葉をかけた。今日は客がよく入る。まだ昼間だというのに。
「そういや、あれだ。王子さまが躍起になって捜しているって話だ……なあ、声かけてみるかあ？」
「大変だよな。わがままな女を妻に持つとさ……あれだと、男でもいけそうだな」
　ニタニタと笑みをもらす男たちは、そっと席を立とうとした――だが。
「おい」
　先程入ってきた客が、そのとき声をあげた。怪訝な顔をする男た

ちに向かって、旅人のような客は、懐から出したコインをはじき、見事男の手におさめる。

「……その話、詳しく聞かせてくれ」

客はフードの奥から、コバルトブルーの瞳を光らせ、そう言った。

（2）

（2）

少年は実に不愉快だと言わんばかりに頬を膨らませ、足早に歩を進める旅仲間のマントを引っ張った。
「どういうつもり？　さっさと店を出ようと言ったり、ひとりで楽しんだりさぁ」
「楽しんだつもりはない。あれは邪魔だったから仕方がない」
「よく言うよ」
ちぇっと肩をすくめる少年は、しかし面白そうに含み笑った。
彼女に言われ、昼食を食べ終わる間もなく早々と店を後にしようとしたそのとき、店の客に声をかけられたのだ。あまりのしつこさに辟易した彼女は、情け容赦なく声をかけてきた男たちを殴って地へと伏せた。「きれいだね。愉しいことしようぜ」と誘われたのは、彼女ではなく彼のほうなのだが。
当の彼はしかし、断ることをしなかったのだ。「どうしようかなあ～」などとしなをつくり、あきらかに挑発していたのだ。そんな少年に苛々したが、なんとか彼を殴ることだけは我慢し、よってそのとばっちりとも言うべき怒りは男たちへと向けられたのだった。
「あーあ。せっかく生気いただこうと思ったのに。アジェが邪魔して楽しそうに殴っちゃうんだもん。僕なーんにもできなかったあ」
「獲物だったわけか……それにわたしは、楽しんでなどいない」
少年の言葉に、アジェは深く息をつく。彼にとって破壊は喜びなのだろう。……それにしても、あの男たちはなんと幸運なことか。

殴られただけで、生気を吸われるという危機から脱したのだから。
「おまえは自分の容姿を自覚しろ。マントをかぶれ」
買ってきたマントのフードを無理矢理かぶせ、アジェはさらにため息をつく。極力目立ちたくはなかった。なのに、彼と行動をともにすればいやでも目立つ。
しかし、少年は彼女の憂いを知ってか知らずか、思わず見とれるほどの柔い笑みをこぼした。
「僕はアジェのほうがきれいだと思うよ……それに、名前で呼んでくれるとうれしいなぁ」
「名を呼べば言うことをきくのか」
契約をしてしまったことをはやくも後悔しつつ、アジェは問う。すると少年はやや考え込むように眉根を寄せていたが、やがて不敵ともとれる笑みを彼女へと向けた。
「それも悪くないかもね」
なんとも魅惑的な笑みだ。その琥珀色の瞳を揺らして、口の端だけをわずかに上げて微笑する蠱惑さに、惑わされぬ人間などいるのだろうか。
だがしかし、アジェは無意識に寂しそうな笑みを一瞬浮かべたあとで、そっと少年の頬に触れた。

「――エダ」

声はやや低く、あまい。本人には自覚はないだろうが、この声で囁かれればそこいらの人間を骨抜きにすることも可能だろう。少年はそう思い、そして同時にもったいないなと感じた。
彼女の外見は美青年そのものであった。すらりとした長身で、その長い前髪からのぞくコバルトブルーの瞳はやや冷たいが、それがストイックな雰囲気の魅力を引き出している。エダだって、彼女の思いの外ふくよかな胸を触らなければ気づかなかった。もし彼女が本当に男であったなら、女には苦労しない生活を送れたであろうと

思うと、彼女の性別は実にもったいなかったのだ。
　再び足をはやめに動かしはじめたアジェにつづき、名を呼ばれたエダも素直に歩いていく。いったいどうして急に急ぐはめになったのかそのいきさつは皆目わからなかったが、エダにとってそんなことはどうでもよかった。アジェと契約した、そばにいたい、だから彼女の隣を歩く――それでいいのだ。

「そういえば、なんか卑猥だね」
　それまで黙って彼女のあとにつづいていた少年が唐突に口を切ったのは、ちょうどアジェが色街の看板のかかっている道角を曲がろうとしたときであった。
　怪訝そうに顔を歪めるアジェに、エダは肩をすくめる。
「その看板だよ。もしかして、アジェは僕とそういう関係になりたいとか？」
　少年にとって、彼女と関係を持つことはとりたてて拒絶すべきことではなかった。しかし、あきらかに彼女はそういった関係を拒むだろうことは容易に想像できていたため、どうして色街などに足を運ぼうとしたのか疑問に思い、エダは口をひらいたというわけである。
アジェは予想通り、眉間にシワをよせて『つまらん冗談を』という顔をして応えた。
「ふざけているのか？」
「ちがうよ。でもさ、気になるんだもん」
　ぷう、と頬を膨らませて、少年は頭のうしろで手を組んだ。
「さっきから、なにをソワソワしているわけ？」
　アジェは少年の言葉にサッと顔をしかめ、しまったとばかりに口をおおう。だがすぐに、小さく舌打ちしたあとで口をひらいた。どうやら秘密にしておくことではないらしい。
「おまえも聞いていただろう？　あの男たちの話」

「アリス王女のこと？」
裏道に入ったところで足を止め、暗がりの壁に背を預けて、アジェは腕を組んだ。どうやら長話になるらしい。
「そうだ。アリス王女の脱走……そしてきっと、王子は彼女を求めてくるんだろうな」
エダは小首を傾げた。たしかに先ほど店で、彼女は男たちに『アリス王女』の話を尋ねたのだった。もちろん、金を払って。
だが、エダにはアジェがなぜアリス王女に興味をもつのかわからなかったのは事実。もし、アリス王女を無事保護して王宮に届けることができれば、莫大な謝礼金が手に入ることだろう。だが、アジェにはそういった金に関する欲求は無縁に思える。正義感から彼女を捜し出そうとしているようにも思えない。だから、なぜそんな情報を欲したのかが不思議でならなかった。
「まさか、王子さまに会ってみたいとか？」
「いいや。むしろ会いたくはない」
ふるふると首を振って否定する彼女に、エダはふうん、と肩をすくめる。じれったい。いったい、どういう意図で彼女はどこへ行こうとしているのか。
だいたい、色街に行く意味がわからない。アリス王女となんの関係があるのかもわからない。わからないことばかりで、エダは若干イライラした。
そして少年は、その苛立ちを隠そうともせず、むしろ責めるようにアジェに目を向け、口を尖らせた。
「おねぇさーん！　僕、さっぱりわかんなぁい」
「……貴様、男たちの話は聞いていなかったのか？」
「聞いてたよ！　聞いてたけど、興味なかったもん。それに僕は目の前のおいしい誘惑には勝てなかったんだもん」
ちょこん、と小首を傾げていじける仕草をする少年は、実に愛らしい。上目遣いの絶妙な角度は、彼をさらに可憐に見せる。そしてそれをわかっていて実行する性格は実に腹黒いことこの上ない。

アジェはため息の入り混じった声で「このガキ」とつぶやく。
つまり彼は、アジェが男たちから情報を聞き出しているのを耳に入れてはいたが、話声は見事に耳を素通りし、少年は食事を平らげることに夢中であったというわけだ。
「まあいい。一から話してやる」
冷静になれ、と自らを律し、アジェは腕を組み直した。
「わーい。でもさ、さっきまで急いでいたのに、こんなにのんびり話なんかしててもいいわけ？」
「……問題ない」
悠長に振る舞える時間はない、はずだった。いったいだれのせいで時間を食っているつもりか、という文句をなんとか飲み込み、アジェはいつもの、何物にも動じない無表情をつくって、少年を見つめた。
「そう、問題はない……おまえにも手伝ってもらうことにした」
はじめは自分ひとりで終わらせるつもりだったが、気が変わった。時間を食った見返りは倍にして頂く。――アジェは無意識に、心の内で笑みをもらした。

(3)

（3）

アリス王女――スワズレッド王国の王妃にして、国の宝とされる存在。彼女には不思議な力が宿り、この世界を破壊することも創造することもできる神のような存在。

この国には、王家の掟（ロイヤルルール）がある。その禁忌は決して破ることは赦されず、何者にも侵し難い絶対なルールであった。

建国してからずっとつづいている伝統――アリス王女制度。彼女の絶対的な力の前には、どんなことも無に等しい。強大な力を秘めた存在、それがアリス王女だった。

アリス王女に選ばれた少女には、力が与えられる。そして同時に、その凶悪にすらなりうる力を封じるため、少女からは『なにか』が奪われる。その『なにか』はいわゆる力のストッパー。アリス王女は『なにか』を奪われる代わりに、地位と名誉、そして無限の愛と強大な神の力を与えられるのだ。

アリス王女は民から尊敬され、王からは愛され、幸せに暮らす。大事に大事に育てられ、守られて生きていく。

不幸や不満など、生じるはずもない。

「……それなのに、今回彼女は城を逃げ出した。どういうことだろう……」

アジェはまったくといっていいほど話のわかっていなかった少年に、アリス王女のこと、そして男たちから「アリス王女を色街で見かけた輩がいる」という情報を聞いたということを教えてやっていた。

いまいち城を抜け出して色街へ赴く経緯が見えず、眉根を寄せて唸るアジェに、エダはあっけらかんとした調子で言った。
「脱走したい気持ちなら、わかるなあ！　それにそういう理由って、たくさんあるじゃん」
「だが、彼女は城の外へ出たことがない……なぜ色街なんかに……」
「駆け落ちじゃない？」
ヒューッと口笛を吹いて、肩を揺らす少年。アジェは目を細めて、そんなふざけた態度を取る少年を極力視界に入れないように努めた。
「そんなはずはない。ありえない。言っておくが、アリス王女の夫となられるロナウド王子に敵う男など、そうそういないだろう」
「へえ。そんなにいい男なの？」
エダははじめて興味を示す。若干身を乗り出し、アジェの顔をしげしげとながめた。
「申し分ない。ルックスも性格も上等だ。民で彼に憧れぬ女はいない」
淡々と述べる彼女に、エダの眉はぴくりと動く。
様子が変だ。というか、怪しい……アジェは思わず顔を歪める。
実際、ロナウド王子の見目麗しさは国でも有名な話であった。他国からは是非妃にと、求婚を求む姫君たちが絶えないらしい。
彼の父でもあるスワズレッド国王は、なかなか子供に恵まれず、息子はロナウドただひとりであった。加えて国王自身にも兄弟はいなかった。そのため世継ぎもなんの争いもなく決まり、ロナウド王子も王になるべく日々励んでいた。
スワズレッド国はここ数世代に渡って大きな戦争はなかった。民は善王をたたえた。国は平和だったのだ。
そうして人々は言う――ああ、これもすべて、アリス王女のおかげだ、と。
それはただの神話にすぎぬのかもしれない。アリス王女がいれば、国はいつまでも平和などということは、どう考えても現実離れしている。だが、とアジェは考える。

――ロナウドが王になれば、アリス王女の力など関係なしに、きっと国はすばらしく栄えるであろう、と。
「おねーさんが、そんなに異性に対して語るなんて思わなかったなあ」
ふと我にかえれば、挑戦的なまなざしをした少年が目の前にいた。アジェは顔をしかめて見つめかえす。
「なにを……」
「ねえ、おねーさんもそう思う？　その王子さまって奴が、だれにも敵わないって」
アジェは目を見開いた。
そうだ。そういえばこいつは、王家に捕われていたのだ。王を殺した、ということは、ロナウド王子の父を殺したということ。まだ町で戴冠式の話は聞いていないが、近いうちにロナウドが王となるのだろう。
この少年は、恨みをもつのだろうか。王となったロナウドをも殺そうとするのだろうか。
アジェは無意識に、生唾を飲み込んだ。そして震えた――恐れからではない、怒りから。
「妬けるなあ」
だがしかし、少年は彼女の予想を裏切り、瞳を楽しげに揺らして言った。
「この俺様より美形だっての？　本当に？」
口の端だけで笑う少年は、今まで見ていた彼とは別人のようだった。その眼は誘うように、色香を放っている。
それに今、彼は自分のことを『僕』ではなく『俺様』と言った。はたして、この無垢そうに見える少年の裏にはなにがひそんでいるのかと、アジェはなんとなく興味をもってしまった。
エダはアジェの顎に手をかけながら、じっとそらすことなく、その色の瞳を向けて不敵に笑む。だがしかし、しばらくしても女の顔に戸惑いやら恥じらいといった感情が微塵も表れないのを見て、大

袈裟にため息をこぼした。
「おねーさんさぁ、もうちょっと反応してよ。ときめきとか、しないわけ？　僕、自信なくしちゃうな」
「なにを……」
「たとえば顔を赤らめるとかさあ！　僕の顔が間近にあってもそんな無反応なの、おねーさんくらいだよ？」
頭大丈夫？　とかわいく首を傾げて言う少年に、アジェは殴ってもいいだろうかと悩んだ。
もともと反応が薄いのは生れつきだ。だが、周りの人間からそれをとやかく言われたことはない。――いや、ひとりだけ。たったひとりだけ、彼女に「笑顔」を要求した者がいた。
「……わたしはまだ、うまく笑えてはいないな……」
「ちょ、ちょっと！　アジェってば、すんごく失礼な人間だね！　普通、人の話の最中に物思いに耽らないでしょ」
我にかえれば、まだ幼さを見せる少年が口を尖らせて、アジェの身体をバシバシとたたいていた。あわてて謝ると、ようやく攻撃をやめてくれる。
「いいよもう。どーせ、アジェは普通のヒトじゃないんだし」
「……どういう意味だ」
眉をひそめる彼女に、エダはお返しとばかりに深く笑んだ。
「言葉通りですよ」

（3）（後書き）

次回から文字数増やします。
そして動きも出てくるかと思います＾＾

のろのろ不定期更新ですみませんが、よろしくお願いします！

（4）

（4）

空は赤くなりはじめていた。色街が徐々に活気づく頃合いだ。

エダは物陰に身をひそめて『彼女』を待つアジェの後ろ姿をぼんやりながめながら、ふと物思いに耽っていた。そう、あれは王家直属のハンターに捕らえられたときのこと。

お世辞にもハンサムとはいえない、太った王だった。欲望によって曲がったような鼻が特徴的で、エダは捕われの身であるにも関わらず、つい笑ってしまった。

王は捕らえた獣人をしげしげと見やると満足そうな顔で家来に告げた。「これであやつの分は埋まる。我が国ももうすこし生きながらえることができる」と。

エダはすぐに、なにかあると思った。だからしばらく観察することにした。

王はさらにつづける。「愚息はすぐに殺してしまえ。あの女も殺してしまえ」そうしてあわてて、欲望にまみれた笑顔で家来たちに命じたのだ。「だが、力は殺すな。生きて捕まえろ。そうして余の后に迎えてやろう」と。

エダは首を傾げる。獣人殺しの手錠が気持ち悪くて仕方がなかったが、それよりも、この人間が自分を捕らえてどうするつもりなのか知りたかった。

王はふいに檻に入った獣人を見ると、ニヤニヤ笑いを強めてつづける。「そうだ。后に迎えたあとで、あの女とこの化け物を交配さ

せてやろう。きっと産まれてくる赤子は、凄まじい力を秘めているにちがいない……」彼は汚らしい指を獣人の頬にのばしてニタニタと笑みを広げる。「そうすれば用済みだ。女も獣も邪魔なら殺せばいい。よし、そうしよう……」

ハッと息をはき、エダは目をとじて肩をすくめた。所詮、人間の考えることなんてこんなものだ。力を持つ獣人を従えようとするだけなのだ。

馬鹿らしい。それに、苛々する。

手首にひしめく重たい手錠にチラと目を走らせ、エダは再度ため息をこぼした。

――邪魔だ。

そうして、呪いをかけはじめる。欲に溺れた人間に、最大級の嫌がらせをしてやるのだ。死をもって、自分を捕らえた罪を償わせてやるのだ。

このとき獣人の少年は、囚われてからはじめて深い笑みを見せた。

「エダ」

ふいに名を呼ばれ、少年の意識は覚醒する。ずいぶん呆けていたようだ。

「なに？　お目当ての人？」

途端にぱあっと顔を輝かせ、エダはアジェの背中に飛びつく。その勢いにやや前のめりになったものの、彼女は踏ん張って身体が傾くのを防いだ。

「ム。アジェってば、力あるんだね。やんなっちゃう」

押し倒そうとしていた少年は不敵ともとれる笑みを浮かべていたのだが、今のアジェには構ってなどいられなかった。あとでたっぷり叱ってやろうと心に決め、されど今はそれどころではないのだと少年に向き直る。

「あの娘を捕まえてこい」
「どーれどれ？　あ、あのかわいい子？」
アジェの視線を追うまでもなく、エダには『彼女』がわかった。
ふんわりした淡いピンクの、この場にはそぐわない上品なドレスを身に纏った少女がいた。ブロンドのゆるくウェーブのかかった髪は腰まで流され、丸い大きな瞳はまだ幼さが残る。けれど白い肌と赤い唇が印象的で、この色街では――否、城下ではどこだって場違いな格好なのだが――いやでも目立ってしまう。
エダは任せなさいとばかりに、軽くウィンクした。
「気をつけろ」
「ん、もちろん！」
走り出した後ろから、やや気にかけたような声を聞き、エダはちょっぴり優越感を覚えた。彼女が心なしか心配してくれるのは、身を案じてであろうか？　それとも単に、少年という存在自体が――というより彼の性格が――心配なのだろうか？　どちらにしろ、エダは前者だろうとしか思わなかったのだが。
エダは足をゆるめ、しかし軽快に進む。
『彼女』は目立つ。あきらかに周りの人たちは、彼女を色街特有の目で見ている。陰で数人の男がなにやらニヤニヤしながら話しており、今すぐにでも『彼女』に声をかけそうだ。
そして案の定、エダには汚らしいとしか言いようのない、欲望を隠そうともしない笑みを浮かべた男たちが数人、『彼女』を囲った。
腕をつかまれパニックに陥ったのだろう。『彼女』は「やめてください！」や「わたしは人を捜しているんです」や「気安く触らないで！」などと、余計に男たちを煽るような声をあげ、さらには目にたっぷりと涙を浮かべた。
「大丈夫、怖くないよ？」
「そうそう、気持ちイイだけなんだからさ」
ゲラゲラと笑いながら、男たちは連なる店のどこかへ『彼女』を引き入れようとする。ここは色街なのだから、そこいらじゅうに並

ぶ店はすべてそういった関係のところだ。場所に困るはずもない。
『彼女』の瞳が恐怖に震える――エダはここぞとばかりに舌なめずりし、颯爽と『彼女』の前へ飛び出した。

「待て待ておまえたち！　か弱いいたいけな乙女になにをする！」
手を振り上げ、娘を庇うようにそう言えば、すぐに男たちは反応した。
「なんだおまえは？」
「ガキは引っ込んでろ！」
そんな罵倒を浴びながらも、少年は意に解さないように、柔く笑って彼女を和ませる。男たちに捕らわれていた腕を開放し、安心させるようににっこりすれば、たちまち彼女は顔を赤らめた。
「ふざけるな！」
逆上した男たちは鋭い拳を幾度となく少年へ撃ちこむ――がしかし、彼はひらりひらりとかわしていき、ついには可愛い顔からひとにらみを投げつければ……たちまち男たちは震えあがり、「おぼえてろよ！」と泣きながら退散するのであった……。

「――うーん、完璧！」
脳内で繰り広げられる妄想にゴクンと唾を呑み込み、エダは満足気に目を細める。そしていざゆかんと、涙をこぼす少女の前へと出て口をひらいた。
「待て！　貴様ら、そこを動くな」
エダは手を振り上げて口をひらいたまま、その口から出ることのなくなった言葉を呑み込む。少女を守るように出て行った姿はむなしく、どこからか冷たい風が吹いてきそうだった。
いざ！　と勢いもよく少女のもとへ出たエダであったが、考えたせっかくの台詞が言われる前に、茶色っぽい黒髪の男が現れたのだ。彼は唖然とするエダをよそに、「待て！　貴様ら、そこを動くな」と言うや否や、男たちの前に立ちはだかって、鋭く大きな剣をかざ

していた。
「この方に触れた罪は重いぞ！　だいたい、女の子はやさしくが基本だろうが！」
「なんだおまえは？」
「邪魔するな！」
エダの台詞を悉く奪っただけでは飽き足らず、どうやら彼は少女を護る騎士（ナイト）役までかっさらうつもりらしい。顔を真っ赤にして、手に手にナイフやらの武器を持った男たちと戦う憎き男の姿をながめながら、エダは肩をすくめて両手をあげた。
「オーケー。それじゃフェアにいこうよ」
だれも聞いちゃいない。ナイトは今、男たちを懲らしめる真っ最中なのだから。
けれどそんなの、エダには関係なかった。
「僕はまだ子供だし？　いいよ、別に。剣でカキーンなんて、カッコいいことできないし。うん、でもいいよ、別に。アンタはそのむさくるしい男たち相手に無駄な汗を流せばいいんだ。そして僕はこの可愛らしい女の子を慰める係りに徹しようじゃないか！」
言うや否や、くるりと少女へ振りかえり、安心するようなあまい笑みを顔にはりつける――が。
「なにをブツクサ言っている。来い！」
頭をガシリと捕えられ、エダは笑顔もむなしく、『彼女』とともにアジェに連れられ、騒がしくなった色街を後にした。

「さあ、もう大丈夫ですよ、お嬢さ――ん？」
男たちをやっつけ、緑の瞳を細め、キラリと光る白い歯を見せて笑い振り向けば……
「バカ」
なんとも冷ややかな目をした女がいた。先ほどの、ブロンド色の髪をした上品な娘ではない。彼女は赤みがかった髪をひとつに結い、

クリーム色の軽装に身を包んでいる。肌は色白で、薄い唇はぎゅっとひき結ばれていた。
騒がしくなった色街。こんなところで騒動を起こすとは、まったくバカであると思いながら、彼女は野次馬どもを一瞥し、退散させる。それにしても、目の前の男にはため息しか出ないから驚きだ。
「ディオン。さっさと支度して」
ナイト役に徹していた男をディオンと呼び、ふぅとため息をこぼす。そのままこげ茶の瞳に軽蔑を込めて男に投げかける彼女の名は、カトリーナ。
せっかく助けようとした娘がいないことに愕然としていたディオンも、彼女の一言でやれやれと舌うちまじりに立ち上がり、ぐんと伸びをした。
「獲物に逃げられちゃ、意味ないよ。バーカ」
「うるさいな！　って、え？　あのかわいい娘（コ）、獲物だったのか？」
「……知らなかったの？」
さらにあきれ果てるカトリーナ。まったく、相棒は惚れやすいバカである。
めずらしく、カトリーナは柔い笑みを見せ、歩き出す。
ディオンもそれをあわてて追い、ふたりは色街の闇へと消えた。

（5）

（5）

「へえ、本当かよ！」
なにやらざわめいている店内。まだ日も高いうちから酒を煽っているのは、無精ひげを生やした男だ。
「本当さ。俺ぁ、聞いたね。失われた国の王子さんが、かわいいカミさん連れて逃げてるのさ」
「失われた国って、たくさんあるよなあ。まあ、ロナウド王子さんは好きだけどさ。先代の王さまは、ちょっと狂ってたよな」
支給係の少年は、興奮気味に相槌をうつ。
「侵略しては領土を広げてよ？　アリス王女以外になにを望むんだっての！」
「ほら、あれだろ。アリス王女は息子の嫁だから手出しできなかったんだよ。で、八つ当たりじゃねえか？」
ぎゃはは、と笑い、また二、三人の男たちが酒を片手に話に混ざる。
「失われた国の王子さんもさ、復讐に燃えてるんじゃねぇか？　ロナウド王子はとばっちりってわけだ」
「ところでなんでアンタはそんなに興奮してたんだよ？」
メガネをかけた、髪の薄い男が支給の少年に尋ねる。すると彼は、よくぞ聞いてくれましたとばかりに声を発した。
「それが、復讐意欲に燃えた失われた国の王子さまが、この国にきてるんだよ！」
「へえ！　それで？」

「ほら、先日アリス王女が城を抜け出したって噂があっただろ。で、なんでも偶然見かけた失われた国の王子さまが――アリス王女を口説いていたらしいんだ」
「なんだって？！」
興味深そうに、男たちは身を乗り出す。
「それも、色街で！」
「ほ、本当かよ？」
「ロナウド王子はどうすんだ？　戦争でもはじまるのか？」
「バカ！　相手は財力も兵力もない、失われた国の王子だぞ」
店内の客はさらに騒ぎ出す。すると、先ほど情報を提供した無精ひげの男が、ひとつニヤリと笑った。
「そこで、だ。俺は思うわけだ……そのアリス王女さまを口説いた王子さんを捕まえればいいんじゃねえか、とな」
くいっと喉へ酒を流し込み、彼はつづける。
「アリス王女を見つければ、謝礼金がたんまりもらえるんだろう？　なら、王女さんに関わった人間をロナウドさまに献上すれば……」
「賞金がもらえるって、わけか？」
ごくり、と男たちは喉を鳴らす。金はあればあるほうがいい。酒も女も、やりたいことがし放題だ。
指を立て、男は失われた国の王子の容貌を説明しはじめた――。

＋　＋　＋

「あっちぃ！」
「バカ。冷ましてから食べなさいよ」

顔をしかめ、冷たい水をごくごく飲み、緑色の瞳をした男は唸る。対照的に、あつあつの湯気があがるスープにも構わず、赤毛の女は休むことなくそれを規則的に口へと運んでいる。
男はしばしふてくされたように顔をしかめたが、頬づえをついて彼女をながめているうちに、自然の頬が緩んでしまった。
「……なによ、気色悪い顔をして」
「うん、まあ、口さえひらかなきゃ、イイ女だな、と思って」
容赦ない女の言葉にも、彼はヘラリと笑って応じる。それが気に食わなかったのか、女はフンと顔をそむけて食べることに集中した。
彼はスープが冷めるのをじっと待つ。手持ち無沙汰な様子で、スプーンを揺らしながら、やはり目だけは彼女へと向けている。「カトリーナ」とつぶやけば、それが聞き取れないほど小さい声だったにも関わらず、彼女はちょっと眉をよせつつも「なによ」と応えてくれた。それがうれしくて、思わず破顔する。
「なあ、好きだ。だから、耳出してく――」
「死ね」
言い終わる前に、彼は熱湯――彼が冷めるまで待っていたスープ――を浴びせられていた。
それでも、熱さでぼやける視界に入った彼女の頬が若干赤らんで見えたから、この制裁もあまんじて受けようと、そう思う彼はやはり、どこか頭のネジがはずれているのかもしれなかった。

「それにしても、俺様の邪魔をしてくれたあいつら……」
ふいに声を低めて、いつものへらりとした笑い方をディオンが引っ込めたのは、翌日の朝のことだった。部屋は狭くきれいとは言い難いが、安い上に朝食付きという、旅人にはありがたい宿を出てからのことだ。
カトリーナは肩をすくめたが、それでも頷いて応じる。
「そうね。あなたの邪魔をしたのはどうでもいいことだけれど、『

彼女』を連れ去ったことには納得できないわ」
　ディオンが周りも見えずに悪党を蹴散らし、失踪中だという噂の姫君・アリス王女を手に入れるはずだったのだ。なんでも、今婚約者のロナウド王子が血眼で捜索中というではないか。
　しかし、事は上手くいかなかった。途中でディオン曰く邪魔者――少女と見間違えるほど愛らしい顔をした少年と、冷たいがこれまた端正な顔立ちをした人物にアリス王女を取られてしまったのだ。
　カトリーナは訝る。いまだ、ロナウド王子の元へ王女が戻されたという噂は聞かない。もし、謝礼金目当てならば、とっくに引き渡しているはずではないか。それに、彼らがアリス王女の身体目当てだとは思えない。人売りにも見えなかった。では、いったいなにが目的なのか。そして、彼らはいったい何者なのか。
　ディオンは彼らの顔をはっきりとは見ていなかったようだ。彼の長所でもあり短所でもあるところは、目的以外を一切排除するところだろう。そして単純で実に惚れっぽい。彼はカトリーナが言うまで、男たちに言い寄られていた少女がアリス王女だとは知らなかったらしい。
　正義感が強く、惚れやすく、単純で、まっすぐな馬鹿――そんな彼だからこそ、カトリーナは相棒に選んだのだ。

「あーあ。俺の賞金が！　俺の夢が！」

　大げさにがっくりとうなだれる男。しかし、カトリーナはいつもの冷ややかなまなざしではなく、切なそうに目を細め、彼女にはめずらしい、やさしげな声音で「ディオン」と彼の名を呼んだ。
　そんな彼女に、彼は一瞬びっくりと目を見開くが、やがてバツが悪そうに頭をポリポリかいてから、ふいに柔く笑んだ。
「そんな顔するなよ。大丈夫。まだアリス王女は王子さんの手に渡ってないんだから。俺らがあの忌々しい邪魔者から横取りすりゃいいだろ？」

「そう、だけど……」
「なんだよ。心配してくれてるのか？　なんなら、今夜とか――」
「行くよ」
「え？　ま、待てよ！　ちょっとは口説かせろ！　なんだったら――」
「さっさと逝け」
「またまたぁ。さっきのしおらしさはどうしたよ。俺のこと心配してくれたんだろ？　だったらさ、今夜くらいおまえの柔らかい――」
「……死にたいの？」
氷点下のまなざしを男へ向ける。この男は口が減らない。油断も隙もあったものではない。
そんな彼女にも構わず、というよりは挫けず、ディオンはからりと笑う。
「いいじゃねぇか。だれがなんと言おうと、俺はおまえの、柔らかいあの耳が好きだぜ」
こげ茶色の瞳を大きくさせ、カトリーナは柄にもなくぽかんとした。それにくっくっと笑うディオン。
緑の、深い緑のやさしげな色が深まる。どこまでも深く、深く、なにものをも包み込んでくれるような、そんな瞳。
カトリーナは、思う。ああ、この男は知らないのだ。自分はこの瞳に救われたのだと。この笑顔に救われたのだと。
だから、そうだ。彼を信じてみよう。
だれがなんと言おうと、自分はいつか、誇りを持って彼の隣を堂々と歩くのだ。
「……行くわよ」
冷たい口調から元に戻ると、カトリーナはニヤニヤする男から顔をそむけて歩き出す。

そう、いつか。彼の隣を、本当の自分で歩きたい――たとえ、できそこないの獣人だとしても。

（6）

（6）

息が荒い。久しぶりに全力疾走をした。まったく自分の主は人使い――もとい獣人使いが荒いと、エダはげんなりして思う。

「ちょ、もう、休もうよぉ！」

限界に声をあげれば、こちらは汗もかかずに振り向く彼女が、怪訝そうな顔をした。

どうして獣人の王たる者のくせに、そんなに体力がないんだ――彼女の瞳が暗にそう言っているのを解し、エダはぷくりと頬を膨らませる。

――僕は、アジェみたいに『力の枯渇』を考えないわけじゃないんだから……そう思うものの、少年はなんとか口から出かかる言葉を飲み込む。代わりに大きなため息とともに肩をすくめ、くいと顎で示す。

「彼女だって、疲れてる」

きっぱりとそう言えば、アジェは少年の示す先にいる、自分が半ば強引に手を引いて走らせていた少女に目をやった。彼女は今にも倒れそうなほどよろよろで、息も絶え絶えだ。

しまった、と口を動かしうなだれるアジェに、今度こそ、エダは盛大なため息をこぼすのだった。

ひとまず休もうという流れになった。アジェの先導で色街を抜け

て森のなかを走っていた彼らは、そのまま木の幹に身体を預けて腰を下ろす。
ひどく呼吸を乱していた『彼女』――アリス王女も、今は落ち着きを取り戻し、その瞳にわずかな戸惑いと不安をひめながらも、背筋をぴんと伸ばして座る様は可憐ながらも実に威厳があった。
エダはふと、疑惑が確信に変わったのを悟る。
アリス王女は見ず知らずの人間に連れてこられたにも関わらず、逃げることはおろか取り乱す様子もない。むしろ、フードを脱いだ美青年のようなアジェをじっと見つめ、言葉を待っているようだ。
つまり、彼女たちは顔見知りらしい。
アジェは鋭いともとれる王女の視線を感じながらも、うろたえることはしない。だが、代わりに自身の指先を見つめ、なにかを考え込んでいるようだった。
エダはため息を飲み込む。たえられない。
もとより堅苦しい雰囲気は苦手なのだ。アジェがなにか話し出すまでしばし時間がかかるだろうと悟った彼は、それならばと愛くるしい笑顔を張り付け毅然とする王女に向かって口をひらいた。
「どーもどーも、はじめまして！　僕の名前はエダっていいます」
手を差し出し握手を求めてみる。軽くウインクしたのはご愛敬だ。
アリス王女は一瞬その丸い目をぱちぱちまたたかせたが、やがてどこか警戒の色を浮かべると、冷ややかに言った。
「あなた、そんなに簡単にわたくしに名前を教えていいの？」
きょとんとするエダ。わけがわからない。それに、せっかく笑顔を向けたのに。
少女はさらに冷たい声でつづける。
「わたくしはアリス王女よ。わたくしには力があるのよ。アリス王女には、名前を使って人を操る力があるのよ」
そんなことも知らないの、とあきらかに自分をこども扱いする彼女に、エダは心なしかぴくりと眉根が寄るのを感じた。
しかし、まだ堪えられる。

「へぇ、そう」
「信じていないのね」
エダが肩をすくめて愛想もなく言うと、アリス王女はやや機嫌を損ねたらしい。
「わたくしには力があるの。絶対的な力が」
少女の瞳がランと光る。
「あなたなんて簡単に殺せちゃう。わたくしには力があるから。名前だって知ったんだから。みんなみんな、消えちゃえばいいのよ――」
ぐっと結ばれた少女の唇。エダは堪えきれないとばかりに笑った。びっくりしたのだろう。急に笑い出した少年に、アリス王女は目を見開く。
「あーあ。本当におもしろいね。まぁいいや。もうすこし君の茶番劇に付き合ってあげる」
エダはくすりと笑む。そのまま琥珀色の瞳を妖しく光らせて少女の顔を見た。
「で、君の本当の名前は？」
「なにを――」
「たしかに君は今、アリス王女らしいね。力もそれなりにあるみたいだし？」
クスクスと笑う少年。
「でもさ、知ってる？　アリス王女って、力を得る代わりになにか大事なものを失っちゃうんだって」
――君はなにをなくしたの？
少年の笑みは艶やかだ。目を奪われるほどうつくしく、愛らしく、そして恐ろしい。
その恐ろしさはまるで芸術品のようだ。うつくしいなかに漂う不気味さ、神秘にひそむ触れてはならないその恐ろしいうつくしさ――。
少女は思わず、生唾を飲み込んだ。

「別にね、言いたくないならいいんだよ？　たださ、僕、わかっちゃったから」
にっこりと深くほほえむ彼はやはり愛らしい。
それなのに。
「ねぇ、力を奪って、その地位について、どんな気分なの……偽物のアリス王女？」

追っ手がかかるかもしれない。いや、かかるだろう。
そう思い、人目を引きたくなくて森へ逃げ込んだ。簡単には捕まるまいと、エダを信じて獣の群がると言われる道を走った。そしてそれは成功したらしい。
獣道を走って進んできたにも関わらず、一行は獰猛な野獣になど会わなかったのだから。
さすが、獣人のなかの王――孤獣。
エダの気配を感じてか、獣は隠れてしまったように出てはこない。
そんな獣人であるエダも疲れはするらしい。彼に諭され、息も絶え絶えな『彼女』に気づいて休憩をとり、今は腰をおろしているところだ。
なにやらエダが得意の笑みで『彼女』に話しかけたらしい。先程まで痛いほど感じていた視線が外され、アジェはほっと息をつく。
指先をくるくる回しながら、じっと見つめて考える。これから、どうしよう。なぜ、『彼女』は逃げ出したのか。
そうして思うのだ――ああ、もしかしてまた自分のせいなのか、と。
どうしたらいいのだろう。きっと今頃、『彼』はひどく心配しているのだろう。あれほど『彼』は『彼女』を愛していたのだから。
せっかく幸せになれると思ったのに。それを願っていたのに。
なぜ逃げ出したのだ。なぜ『彼』から離れたのか。

ああ、自分はまちがったことをしてしまったのか。人を不幸にしてしまう、自分は。
とりあえず彼女の真意を聞かなければ――。
「……エダ？」
ふいに顔をあげる。『彼女』に話を聞くためにそちらに顔を向けたアジェは、しばし硬直した。
「――なっ、なにをしているこの畜生！」
「えっ？　は？　なに、アジェ、言葉遣い汚いよ？　落ち着いて、ちょっと待とうよ！」
「待てるか馬鹿者！　そこに直れ！」
アジェは目を見開き、怒りに顔を真っ赤にさせてわなわなと震える。そのまま勢いよく腰から剣を取り出し、悪党抹殺という雰囲気を込めて柄を握りしめた。
エダはあわてる。だが、アジェの怒りは収まらない。
それもそのはず、アジェが見たのは、愛らしい顔を妖艶に歪め、可憐な乙女にのしかかる少年の姿だったのだから。
一瞬言葉を失ったものの、我にかえった彼女はすぐさま立ち上がり怒鳴ったというわけである。
押し倒されていた少女は、エダがよけたにも関わらず身動きしない。それがさらにアジェの不安と怒りを煽った。
彼女の豹変ぶりに驚きあわてたエダは、しかし次第に腹が立ってきた。
気に食わない。自分以外に興味を示す彼女も、自分以外のために感情を剥き出しにする彼女も。
すっと目を細め、少年は愛らしさを隠し、変わりにずっと大人びた、それでもやはりうつくしい顔でアジェを見やった。
「落ち着け。俺は危害を加えてはいない」
いや、実際は危害を加える気は満々だったのだ。『彼女』はたしかに美人とされる部類の娘であったが、エダにはその容姿など魅力には感じられない。なにしろ、彼自身がだれもが見とれるほどうつ

くしく、そして彼にとっては今目の前にいる、一見青年にも見える彼女こそが魅力的だと思える対象なのだから。
少年の冷めた表情と声に、幾分冷静さを取り戻したのだろう。アジェは肩に込めていた力を抜き、眉間に寄っていたしわをそのままに口をひらく。
「……では、なにを……？」
「言っとくけどさ、僕は今、おねーさんのモノなんだよ？」
その意味わかる？　と小首をこてんと傾けて問う少年は、先ほどの冷たい雰囲気など皆無だった。つまり、いつものエダだ。
問われた意味がいまいちわからず、さらに眉間にしわを集める彼女に苦笑し、エダはそっと近寄ってアジェの眉間に触れた。
「……なにをしている」
「んー、しわを伸ばそうと思って」
ぐっ、ぐ、と軽く指に力を込めているエダは、そう言うとからりと笑う。あまりの邪気のなさに、アジェは毒気を抜かれてため息をついた。
やがて眉間のしわ伸ばしに満足したのか、ふいにエダの指が名残惜しそうに離れた。
「……悪かった。勘違いをした」
「ん、いいよ」
あながち勘違いでもないのだが。エダはそんな言葉を飲み込むと、いまだ寝転がって動かない少女へ目を向けた。
ブロンドの細くふんわりとした髪が、広がって垂れている。うつくしい。うつくしく、けれどエダには汚く残酷に見えた。その髪は蜘蛛の糸で、その中心にいる彼女は獲物を狙う醜いイキモノ……。狙われているのは、それこそ本当にきれいなコバルトブルーの瞳にダークグレーの髪を持つ中世的な雰囲気の女性。
はじめて『アリス王女』を見たとき、人形のようだと思った。人形のように愛らしく、だれもが目を惹かれるのだろう。人間ならば。
そして『アジェ』もまた人形のようだ、とエダは思う。『アリス

王女』とはまたちがった『人形』だけれども。
一方はだれからも愛でられるような、かわいいかわいい残酷な人形。もう一方は、多くから畏れ疎まれるような、無表情で愛嬌のない、冷たい瞳の人形。
エダが好むのは、もちろん後者だ。そして、その『うつくしさ』は所詮、ただの人間には――いや、ただのイキモノには理解できないのだろう。
ひとりほくそ笑むと、少年はちょこんと首を傾げてから、アリス王女の状態について説明するために、うつくしい彼女に向かって口をひらいた。

⑦

（7）

「彼女はね、自分の殻に閉じこもってしまっているんだよ」
ニコニコと、さも楽しそうに声を弾ませながら少年は言った。
「きっと己の醜さを知るのが怖くて仕方がなかったんだろうね」
クスクスと声をもらすエダに、アジェは眉間にシワを寄せた。
わからない。目の前の少年を信用していいのかわからない。けれどアジェには、彼を疑うということ事態がまちがっているのだと思えた。それがなぜなのかも、わからないが。
エダはんーっと唸り、やがてぱっちりとした眼をかすかに光らせた。
「あれ？　わかんないかなぁ～。おねーさんさ、まだ僕に嘘をつく気？」
なんだ、それは――そう問おうとひらいた口は、すぐに少年のそれでふさがれる。絡めとるように彼女の口内を蹂躙した少年は、妖艶な笑みを浮かべてやっとアジェを解放した。
いきなりのことに頭はついていかない。はじめてではない行為だったが、以前は生気を吸うためのものだった。しかし、今のそれはあきらかにちがう。言うなれば、恋人たちの交わすそれのような、熱情的な、激しさと甘美さを備えていた。
思い至った途端、アジェは合点のいかない不思議な感覚に襲われる。怒りでも呆れでもない。恥ずかしいだとか、そういう感情の起伏ではない。ただ、彼女が抱くのは、違和感に似た、名前のつかないものだった。

それがわかったのだろうか。しばしアジェの変化をうかがうようにしていたエダであったが、口の端を引き上げる。琥珀色の瞳を軽く細めるものの、その顔に本当の笑みはなかった。
「……気に入らない」
にっこりと口角をあげながらも、少年の目にはあきらかな嫉妬が燃えていた。
「僕以外で感情をあらわにするアジェが、すごく気に食わない。僕より特別なものがあるアジェがすごく気に食わない。僕のキスに戸惑わないアジェが、すごく気に入らない」
普段から饒舌である少年であったが、しかし。
まだ付き合いも浅いし、なにより彼は獣人だ。よくわからないものなのだな、とアジェは思い、さてどうしたものかと首を捻る。
倒れて動かないままのアリス王女も心配だし、これからのことも考えねばならないのに。とにかく、エダの機嫌をなおさなければと、アジェはようやっと口をひらいた。
「……戸惑っては、いた」
「嘘」
考えて言った言葉だ。そう、自分は戸惑っていたはずだ。されどそれもあっさりとエダには否定される。
「嘘ではない。驚いた。わけがわからなかった」
「でも、アジェは動揺しなかった。ちっともその気にならなかった」
じっと、怖いほど真面目にこちらを見つめたまま少年は言う。
アジェはバツが悪そうに眉間にしわを寄せる。そんなことを言われたとて、仕方がないのだ。自分にはどうしようもないのだ。だって、わからないんだから。
しばし思案するように押し黙っている彼女を見つめていたが、少年は大げさにため息をつくと、もういいよ、と肩をすくめた。
「おねーさんにはまだ無理かぁ。ま、いいや」
頭の後ろで腕を組むと、少年は「嫉妬も執着も久しぶりだしな」などとつぶやきながら、ニンマリと笑む。そしてやはり訝しげにす

るアジェには構わず、さっさと説明のつづきをしようと向き直るのだった。
「アジェ、もう嘘はなしにしよう？」
少年の声は響く。彼の琥珀色に見つめられ、アジェは逃れられないな、と感じた。
「ねぇ――本当のアリス王女」

＋　＋　＋

時をすこしばかり遡ろう。
そのころ、人が歩くために造られた舗装された道を進んでいたはずの彼は、いつの間にか行く先々が伸び放題な草木で覆われているのにようやっと気づき、にわかに顔をしかめる。それでも無理やり進んでいくと、ついには自身の背丈にまで草が伸びていて道をふさいでいるものだから、彼の苛立ちは増すばかり。
「なんでっ、こんなにっ、歩きづらいんだっ！」
歯ぎしりしながらも、ぶんぶん腕を振って進もうとする。道は舗装されていたはずではないのか？　なぜこんなにも歩きにくいのか……まるで獣道ではないか。
もともと怒りの沸点が低い彼は、とうとう先ほどから黙って後ろをついてくる彼女を振り返った。
「なあ、カトリーナ。俺たち、迷ったんじゃないのか？」
息も荒く言い放つ男に、カトリーナはちょっとだけ眉をひそめたが、すぐに口をひらく。
「驚くことに、迷ってはいないんだけれどね」
「じゃあ、なんでこんなに荒れているんだ。これじゃ、道なんて呼

べないじゃないか」
「そりゃあ、道じゃないもの」
ぽかんと口をあけ、ディオンは肩をすくめた彼女をまじまじと見つめる。
なんだ、それは。
「道をね、すすすーっと逸れていったのよ。まっすぐ歩けばいいだけだったのに」
指を立てて、つつ、と動かしながらカトリーナは言う。舗装された道を歩くだけ、そんなこともできないのか、と。
途端、ディオンはかっとなった。それもそうだろう。彼女は彼が道を違えたにも関わらず、それを面白おかしくながめながらついてきたのだ。
だが、とカトリーナは口をひらく。
「本当にびっくりした。だって、道を逸れたのに、行きつく場所にちゃんと向かっているんだから」
馬鹿みたいに天才ね、と再度肩をすくめる彼女は、はたして、褒めているのだろうか、けなしているのだろうか……あきらかに後者だということは、言うまでもない。
ディオンはしばし眉根を寄せる。そうして不意に、なにか解したのか、ひとつため息をこぼして歩みを再開させた。
これは彼らにしかわからない変化なのだ――カトリーナがカリカリしていることも、その様子と理由に気づいたディオンが知らぬふりをしたことも、そしてその彼のやさしさをカトリーナ自身わかっていることも、だから先ほどまでとは幾分雰囲気がちがうということも。
カトリーナは歩きながら赤毛を結い直し、気合いを入れようと試みる。足手まといにはなりたくない。せめて、目の前をゆく相棒が、不必要だと思わないくらいにはなりたいのだ。捨てられたくはないのだ。
そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、ふいにディオンは足を

とめた。ハッとして、彼女も耳をそばだてる。
「――西か？」
あきらかに先ほどまでとはちがい、表情に真剣な光が帯びていた。
ディオンは問に頷くカトリーナに、先を促した。
「……西に五十歩、北に三十歩の位置……気配は――三人」
目をとじ、探るように、ひとつひとつ言葉を落としていくカトリーナ。辺りはしんと静まりかえり、鳥のささやきさえ聴こえはしない。そんななか、ディオンはさらに言葉を紡ぐ彼女をじっと見つめている。
「……ひとりは、意識がおぼろ……たぶん、獲物」
「厄介な『ヤツ』はいるか？」
カトリーナは目をあける。風がひとつ、ざわめいた。
「――否、みんな人間」
一瞬見えた彼女の瞳は、その髪色と同じ、燃えるような赤だった。
ディオンは表情を和らげ、彼女の細い手首をつかむ。
「行くぞ！」
ぐいと引っ張られ、驚きに見開くカトリーナ。けれどその口元は緩やかであった。

（7）（後書き）

ご愛読&お気に入り登録、誠にありがとうございます！
不定期更新なのに読んでくださってくれる方がいて、もう感動してます。
ありがとうございます！
読者さまもじわじわと増えていたり減っていたり、うれしいです（笑
すこしでもお楽しみいただければな、と思います。

さて、なかなか進みません……申し訳ない！
獣人なのに獣人っぽくない！つまり、耳とか！笑
もうすこししたら、ちゃんと出します頑張ります！↑

これからも時間潰しにでも目を通していただければ幸いです。

（8）

（8）

喉がからからだ、と感じたのは、彼が自分の目の前まで迫っていると気がついたときだった。

琥珀色の瞳をじっとこちらに向け、少年は触れるか触れないかの、ぎりぎりの距離を保っている。アジェは動けなくなって、しばし、なにも考えることができぬまま、時が過ぎるのをやり過ごしていた。

「……な、なに……？」

ようやっと出た声は掠れていた。おもしろいくらい自分が揺らいでいるのがわかる。

エダはくいとアジェの顎に手をかけて、彼女のコバルトブルーの瞳をじぃっと見つめる。

「そんなに動じちゃってさ。さっきとはえらいちがいだね」

クスクスと声をもらす少年。ささやかな怒りが瞳の奥にちらついている。

しかし、すぐにそれは拗ねた表情によって押し隠された。

「僕をだれだと思っているの、おねーさん？」

手をアジェの頬にかけ、撫でる少年は年下とは思えないほど大人びた、高慢な表情をする。

彼のくるくる変わる表情や感情の起伏に、アジェはすこしばかり憧れを抱いたのかもしれない。胸の奥が、きゅっと音をたてた気がした。

そう、アジェには秘密があった――国中で、最強の力を誇ると謳われるアリス王女が、自分であったという秘密が。

それがいともたやすく、出会って数日しか経っていない少年にバレるなどとだれが考えただろう？　無論、バレるような行為はしていない……いや、したかもしれない。けれどあれは一度だけ。

アジェは頭に浮かんだ、はじめてエダと出会ったときのこと――彼の囲われていた檻や拘束具を一瞬で破壊してしまったこと――を忘却の彼方へと無理矢理押しやり、頭をふる。

あの行為を目の当たりにすれば、彼女がただの人間ではないことくらい察しがつくというものだ。だが、相手はあの伝説とまで言われた孤独の獣王・孤獣なのだ。気にすることはないだろうと勝手に思い込み、完璧に油断してしまっていた。

苦虫を噛み潰したような表情で、アジェはおどけた少年に目をとめる。

バレてしまっては仕方がない。

「……わたしを、どうにかするつもりか？」

慎重に、言葉を紡ぐ。エダは果たして、自分が『アリス王女』だとすれば――いや、もうすでに自分は『アリス王女』を辞めたのだが――なにかがかわるのか？

脅しだろうか。もしや、ロナウドに迷惑がかかるようなことは起きないだろうか。

しかし、そんな考えは杞憂に終わった。エダの一言によって。

「僕が知りたいのは、どうしてアジェが旅に出たのかってこと。それから、どうしてこの女の子が『アリス王女』の代わりになっているのかっていうこと。それが知りたいな。あとはどうでもいいよ」

なるほど、孤獣が好奇心旺盛という噂は事実らしかった。

＋　＋　＋

「……まず、なにから話せばいいのか」

とりあえずと木の元へ腰をおろし、アジェは口を切った。傍らにはアリス王女――もとい、ラシルという名の少女が寝息を立てている。向かえに座ったエダは、そんな少女には目もくれず、ただコバルトブルーの瞳をじっと見つめていた。

「全部知りたい。アジェのことは、なんでも知りたい」

ああ、でも、と彼はつづける。

「とりあえず、僕が推測したことを話そうか？　そのほうが、アジェも説明がすくなくて便利でしょう？」

にっこりと笑う少年は、年相応に無邪気だ。それなのに、彼の笑顔にはどこか逆らえない、ただの子供とは思えない悠然とした雰囲気がある。

アジェは承諾の意味も込め頷いたが、ともにため息のようなものが出てしまったことは仕方がないであろう。

「じゃあ、言うね。まず、アリス王女は退屈でした――」

「は？」

いきなり間抜けな声が出た。自信満々に語るエダは、「邪魔しないで」と彼女を諌め、つづける。

「退屈で退屈で仕方のなかったアリス王女は、ある日気づきました。このままでは、自分の意見もなにもないままにロナウド王子と結婚になる、と」

ロナウド、とエダの口からその名が出たとき、アジェの身体が一瞬こわばった。エダは無視して再度口をひらく。

「そんなとき、ひとりの女の子がいました。彼女はアリス王女のお付きの侍女でした。侍女は、秘かに思っていたのです――自分のほうがうつくしいと、ロナウド王子に寵愛されるべきだと」

物語を語るような口調でつづけるエダの目は、どこか冷ややかだ。笑っているのに、目がすわっている。
アジェはなぜだかわからぬまま、彼の話を聞いていた。
「アリス王女は名案だと思いました。だから、『力』の一部を侍女に与え、アリス王女とさせたのです。自分は晴れて自由の身を手に入れました、とさ」
めでたし、めでたし、と語るエダ。しかし、唐突にアジェは気づいた――ああ、この男はすべて知っているのだと。
いや、それには語弊があるかもしれない。知っているというより、気づいたのだ。悟ったのだ。
わざとらしい推測を連ね、アジェに否定させる――どこまでも、嘘はつけぬだろう。
「わかった。話そう」
いったん目をとじ、アジェは応じた。嘘をついてごまかす気は、なかった。

エダが推測だと言って語った内容は、根本的には当たっているのかもしれない。結局ラシルは王子の寵愛を受けたかったわけだし、アジェも自由を手に入れたのだ。
ただちがうとすれば、アジェには『退屈だ』という概念がなかったことだ。それに、ロナウドとの結婚に不満はなかったし、自分がだれとどうなろうが構わなかった。
アリス王女――そう呼ばれて生きてきた。物心ついたときには、すでに母や父という存在はいなかったように思う。ただ、王女、王女と周囲から言われ、ぼんやりと生きてきたように思う。心には、なにもなかった。
たったひとつ、響いた言葉をのぞいては。

「わたしが、旅に出ようと思ったのは……ある事件がキッカケだった」
アジェは語り出す。遠い過去のような思い出を、頭の引き出しから探った。
「きっかけ？」
「そう。けれど、もうずっと幼いころから気づいていたんだけれど――」
そこでアジェは言葉を切る。物思いに耽ったわけではない。ぴりぴりと肌を刺す気配を感じたからだ。
エダはもっと前より気づいていたのだろう。驚きもあせりもなく、飄々としている。
そして、声があがった。
「ハイハイ、ストープっ」
ひらひらと手を振りながら木陰から現れたのは、茶色っぽい黒髪の男だ。にこやかな笑みを絶やさず浮かべて口をひらく。
「お取り込み中に悪いんだけど、さっさと獲物ちゃんを渡してもらうぜ」
言うなり、男はいきなり笑みを柔らかいものから鋭いものに変え、スルリと腰の剣を引き抜いた。
アジェは警戒しながら構える。『獲物』とは、どうやらラシルのことらしい。今は彼女が『アリス王女』だ。彼女を狙うなら、男ひとりで襲うはずはないだろう。警戒の色を強めたアジェであったが、エダはニタリと場違いな笑みを浮かべた。
「いいねぇ。今日はとっても面白くなりそう……半獣人なんて、めっずらしぃ～」
歌うような少年の声は、その場によく響いた。
瞬間、剣を構え余裕そうにしていた男の顔がさっと青ざめる。と同時に、叢からもうひとつの影がうごめいた。
エダはニヤリと口角をあげると、舌舐めずりをして目を細める。
「本当、アジェのそばは退屈しなくていいよ」

（9）

（9）

エダの目は爛々と輝いていた。獰猛な、野獣のような、まなざしで。

今、彼には少年の愛らしい様子は影を潜め、ただ獲物に喰らいつく猛獣が暴れていた。いや、たしかに彼の姿は通常の少年の姿。それなのに、その動きは人間のものとは思えぬほど素早く、かつ人を傷つけることに躊躇いもなにもないのだ。

なんて奴――傷つける行為すらうつくしく舞っているようだ、と場違いに見惚れたアジェに、そのとき衝撃が走る。

「余所見とはいいご身分だなぁ、オイ！」

「くっ」

ぐぐ、と思い一撃をなんとか小刀で押し返す。しかし相手は剣。刃こぼれした小さなナイフはもはや使い物にならない。これでみっめだ。

「もうちょっと頑張れよ、相棒ォ！」

さらに滑らすように武器を流し、男はアジェの刃物を弾き飛ばした。

草むらから出てきたのは一組の男女だった。アジェはアリス王女に危害が加えられないよう臨戦態勢に入ったが、エダはくすくすとおもしろそうに笑うばかり。そうしてなにか一言放つと――途端、その場は戦場と化した。

男はアジェに、女はエダへと襲いかかったのだ。

アジェは気が気ではなかった。表情にこそ出さなかったが、内心冷や冷やしたと同時に、高揚もした。
エダの――孤獣の戦闘が見れる。
彼女の期待通り、エダの姿はうつくしかった。残虐だった。武器もなく、相手に傷を負わせる。目にも止まらぬはやさで、遊ぶように相手をする。ああ、なんて時限違い。
だが、アジェもそこまでやっとだ。彼女の相手の男は強いのだ。腕がいい。素人ではないのは傍目にもあきらかで、気を抜けば一気に意識ごともっていかれそうであった。
（やはり……力が……）
女の細腕、とはよく言うものだ。そこらへんの男に負ける気はしなかったが、今目の前にいる彼はちがう。剣の筋からいっても、どこかで戦闘を経験しているらしい。きれいな型だ。それでいて、野性的。独特の動きが入って、読みとりにくい。
戦闘、というよりは、喧嘩といったほうがいいかもしれない。
ふいに、目があった――その瞬間、気づく。
（やられる――！）
ばしりとエモノがはじかれ、武器をなくしたアジェにふりかかる、刃。スローモーションで流れてくる、自分への攻撃。
柄にもなく目を見開き、しかし、無意識にアジェは“使おう”とした。
だが。
「ストーップ！」
やけに明るい声とともにアジェは白く細い腕に絡めとられ、同時に危機を脱していた。
（え？）
アジェは、少年の腕のなかにいた。そして少年は、軽々と飛び上がり、木の上に身を寄せている。
あまりの衝撃に鈍い頭で、彼女はやっと言葉を探し出す。
「エダ……？」

いつの間に、こんな近くに移動したのだろう。そしてどんなすばやさでアジェを救出し、抱きすくめているのだろう。
その驚きは、敵方も同じだったようで。仰天に動きを止めた先ほどまで戦っていた男は、間抜けなほど邪気のない表情をしてこちらをまじまじと見ていた。
「なっ、なんだテメェ！　何者だっ」
やっと我にかえったのか、途端に騒ぎ出す始末。エダと戦闘していた女性は、傷を負ったのか、肩を庇い、足を引きずって木の下までやってきた。
「……こいつ、ただの人間じゃない」
苦々しげに言葉を発し、女は地面に膝をつく。あわててと呼ばれた男が駆け寄り、彼女に肩を貸した。
「人間じゃないって……でも、ニオイは人間だったんだろ」
「ニオイなんて、高等な獣人は隠せるんだよ」
あえぎ、女はエダをにらみつけて言った。
「完全なヒトガタになれるなんて……ただの獣人じゃない！」
彼女の声は震え、恐怖が混じっていた。エダは敏感にそれを察知すると、妖艶ともとれる、子供には似つかわしくない笑みを口元に浮かべた。
「そうだね。ただの獣人じゃないよ？　アンタもでしょ」
目を細め首を傾けるしぐさは実に愛らしい。されど、その唇から紡がれる言葉は毒をおび、痛烈に響き渡った。
「そうでしょ？　半獣人のデキソコナイ」
アジェはただ、場面が流れていくのを見ているしかなかった。自分だけが置いてけぼりをくらってしまったようだ。
たしかにエダは見た目とはちがいただの子供でもただの獣人でもない。王と謳われし、孤高の獣――孤獣なのだから。
だが……また相手もただの人物ではなかったらしい。半獣人――

それは、どういうものなのか。
アジェははじめて聞く言葉に、すこし興味をもった。
「……くぅっ」
「カトリーナ！」
呻き、がくりと倒れる彼女を、男はさっと腕を伸ばして受け止める。カトリーナと呼ばれた彼女は、悔しそうにさらに眉間にしわを寄せた。
「ディオン……ご、めん」
――役に立てなくて。
ぽつりと、ほとんどつぶやくように発した彼女の声は、男の拳に力を与えるには充分だった。
男――ディオンは彼女を木の下へやさしく寝かせ、立ち上がる。にらむように、ふたりに対峙した。
「おまえらがただの『邪魔者』じゃないってことはよくわかった」
ディオンは剣を持つ腕に力を込める。
「だけど、俺には譲れないもんがあるんだ。『獲物』は渡してもらうぜ」
真剣なまなざしを受け、アジェもまっすぐにそれに応えるべく声をあげようとした。絶対に渡すことはできない、彼の愛するラシルを傷つけることなどさせない、と。
けれどそれを声にして発するまえに、自分を抱き抱える少年によって遮られてしまった。
「どうして？　どうしてそこまで力を望むの？」
エダはわざとらしく首を傾げる。
「アンタたちは――いや、アンタは賞金目当てじゃないよね……？」
くすりと含み笑い、少年は敵意剥き出しの男に問いかけた。それから、荒い息を繰り返す女を指差す。
「このヒトを助けたいから、『アリス王女』を、その力を望んでいるんでしょう？」
「そ、それは……」

「……ディオン……？」
エダの言葉に見るからに動揺するディオン。そんな彼に、先程より状態の悪化しているカトリーナがかすれた声で尋ねた。
「ど、どういう、こと……まさか、あたしのため……？」
正面から、ほとんどすがるように彼女に見つめられ、ディオンに逃げ場はない。うろたえ、口のなかでもごもご言葉を探っているようだが、うまい答えは出てこない。
「いや、俺は……」
「でもそれは無理だよ」
おろおろしている男を、琥珀色の瞳が嘲笑った。
「だって、アリス王女の本当の力は、僕のモノだから」
ニタリ、とやはりこどもに似つかわしくない笑みを浮かべて。淡々と、エダはつづける。
「アンタは、『アリス王女』の絶対的な力を使って、そこのデキソコナイを獣人か人間かにしようとしたんでしょ？　アリス王女の起源は、獣人にあるもんね」
「エダ……それはどういうことだ？」
彼の言葉に、それまで黙っておとなしくしていたアジェが顔をしかめた。はじめて聞くことだ。この孤獣は、いったいなにを知っているというのだろう？
エダは純粋に疑問を投げかけるコバルトブルーの瞳を、すこしだけ呆れの入ったような、それでも愉快そうなまなざしで見やる。それから、ようやく口を切った。
「ニンゲンたちには隠されているけれどね、アリス王女の力は、獣人の血をたくさん飲ませることで現れるんだよ」
獣人の力を封じる、≪獣人殺し≫。さりとて、それは万能ではない。能力の卓越した孤獣などは、簡単にそれを破ることすらできるのだ。

だから、ニンゲンの頂点たる王は考えたのだ。なれば、その力に匹敵する存在を手に入れよう、と。
ひとりの人間の少女が選ばれ、赤子のときからみっつになるまで、毎日毎日、獣人の血をすすわされる。拒絶反応で死ぬ人間もすくなくないが、生まれたての赤子のなかにはそれを受け入れる者もいるのだ。赤子は、ニンゲンに必要な『なにか』を失う代わりに、獣人に匹敵する力を得る。
それは王の切り札であり、周りの恐れになる。ゆえに、『アリス王女』は延々とつづいてきた伝統だったのだ。
初代の、この力を手に入れたのがアリス。よって、力を受け継ぐ者の名を、今も同じく語っているというわけだ。
選ばれた『アリス王女』の末路は様々だ。王の妾になる者も、一生日陰の身として生きる者も、いる。ただ、彼女たちの力は一代のみ。決して『ニンゲン』との間にこどもを孕むことはなかった。
創られた『アリス王女』。そこには、たくさんの獣人の命が費やされる。この秘密は、方法とともにだれにも語られはしない。王家の秘密だったのだから。

これが真実だよ、と少年は愛くるしい笑顔で締めくくった。
周囲は、みな、一様に呆然とする。
ディオンはカトリーナの視線から逃れるように。カトリーナはどこか思いつめるように。そしてアジェは、知ることのなかった真実に慄き、次いで、かつて言われた『彼』からの本当の言葉の意味を悟った。
――君は、まだ本当に笑えていないんだ。だから、いつか、その笑顔を見せてほしい。
――もう、『アリス王女』は君で最後にしよう。
――アジェ、君は、僕にとって大切な人に変わりはないんだから。

妹のように、かわいがってくれた。友人のように、親しみを込めて接してくれた。そんな、彼の言葉は、ニンゲンらしくないアジェの心のなかで、ずっと輝くように残っているのだ。ありえない、ことなのに。

「……わたしは……だから、力を分けたんだ」

ぽつり、とつぶやくように言葉を落とす。先ほど、エダに迫られ、話そうとした過去のことを。旅に出た、キッカケを。

「あの人が――ロナウドが、ラシルを好いているのを知っていたから。わたしを大切だと言ってくれたあの人に、幸せになってほしかったから……『アリス王女』に力が必要なら、わたしの血を飲ませて力をすこしでも分ければ、それでいいと……」

このままでは、ロナウドが自分と結婚してしまう。そうすれば、ラシルは彼をあきらめるしかない。

事件は、単純だった。嫉妬し、我を失ったラシルがアジェの寝室へもぐりこみ、殺したあとで自分も死のうとしたのだ。

その場を見つけたのは、ロナウドだ。彼は、彼に似つかわしくないまなざしで、ふたりの少女を――無表情で首を傾げるアジェと、涙を散らしながら嗚咽するラシルを――交互に見やる――そのとき、気づいたのだ。はっきりと。

彼は、ラシルを愛している。アジェのことは好きでも、その感情の種類がちがう。

だから決めたのだ。なれば、自分はここにいないほうがいいと。

アジェは自身の血の入った小瓶を渡し、ラシルへと飲ませた。そして自分は髪を短く切り、引きとめるロナウドを振りきり城を後にしたのだ。

幸い、アリス王女の姿は国民には知られていなかった。だから、だれがアリス王女のなろうと、構わなかったのだ。

「わたしは、構わなかった。ふたりが幸せなら……旅に出る目的も

できたから」

――わたしも、泣いてみたいんだ。

「エダ……わたしは、なにか間違っていたのか？　ロナウドに、迷惑をかけてしまったのだろうか……？」

彼女らしくもない、弱気さだ。エダはむず痒い気がして、すこしだけ肩をすくめた。

「さぁ？　それは、本人に聞いてみましょうよ」

すたり、と一気に木の下へと降り立つ。カトリーナも気づいたようだ。いきなり目を見開き、きょろきょろと辺りを見回す。

「ディオン！　東から足音がする！」

「なにっ」

「はやく逃げた方がいいよ？」

鋭いまなざしになったディオンに、エダは相変わらずの笑みを浮かべた。

「その足音のなかに、狩人（ハンター）もいるからさ。半獣人なんてめずらしいの、捕まっちゃうよ」

アジェを地へ下ろし、少年はぐんと伸びをする。漆黒の髪を気だるげにかきあげた。

「僕は隠そうと思えば隠せるけど。アジェもいるし。でも、アンタらはさっさと逃げた方がいいと思うよ。それに――デキソコナイは、僕のそばにいるとつらいんだ」

――力に、あてられるからね。

にっこりと目を細めた少年。その背後から、禍々しいオーラがあふれているような気がする。

ディオンは、顔をしかめた。それから、一気に怒りがこみ上げる。

道理で、先ほどからカトリーナの容体が悪くなるわけだ。たいした出血をしているわけでもないのに、もう肩で息をしている。

「なんだよそれ。はやく言えよ！」

「あのときの仕返しだよ」
「はあ？」
「いいから。はやく行っちゃえ」
べーっと舌を出して、エダは最後にケラケラと笑ってやった。
仕返し、とは――『アリス王女』もとい、ラシル強奪の際に、麗しく颯爽と助け出すという登場シーンを邪魔されたことの仕返しに他ならないのだが。
ディオンは口のなかで「クソガキ」と悪態をついたが、それ以上構っていられないと判断したのだろう。荒い息のカトリーナを背負い、「覚えてろよ」などとどこぞの悪役のような捨て台詞を吐いてさっさとその場を後にした。
「……エダ、おまえ……」
「さーて。ここからは、おねーさんの出番だよ？」
さすがに、アジェでもわかる。近づく足音。それから。
彼の、気配が。

（10）

（10）

大勢の足音が聞こえ、気配がする。アジェはその場に硬直し、しばらく無言を貫いた。

頭のなかではめまぐるしく思考が消えては浮かびを繰り返している一方、まったくと言っていいほどなにも考えられない。

どうする。彼と会うのか？　どの面さげて、会えるというのだ。

今の状態はどうだ。ラシルは気を失い、小さなこども――エダと自分だけ。言い訳はできるか？　彼だけならまだしも、ハンターを含めた大人数がいるというのに。

ハンター、という単語が頭に引っかかり、アジェはハッとして顔をあげる。どうにか鈍った頭をフル回転させ、浮んだ心配事を少年に突き付けた。

「エダ！　ハンターがいるって……」

おまえは逃げなくていいのか、という問いは、彼のあきれるほど清々しい笑顔の前に消え去った。孤高の獣人の王を心配するなど、ばからしいということか。

けれど、エダは顔を見られているはず。王さま殺しとして手配されていてもおかしくはない。ロナウドとて、父を殺されたのならば恨みもあるかもしれない。

ニンゲンとは『そういうもの』だろうと、アジェは思い至った。

やはり、彼と――せめて、彼だけは逃がすべきだろう。

「エダ……？」

急いた気持ちを押しとどめ呼びかける。思いの外近くにあった端

正な顔が、ゆっくりと笑みを深めた。
「大丈夫、なんの心配もいらないよ。アジェはただ、覚悟だけしておいてね」
契約したこと、忘れちゃだめだよ――ささやくように声を落とし、少年は足音の方へと顔を向ける。アジェも自然とそちらへ顔を向けた。
そうこうしているうちに、時間切れになってしまったらしい。すぐそこまで気配はやってきた。

覚悟、とはなんだろう。彼に会う覚悟なら、たった今できた。

ガサリと音をたてて、とうとう『彼』が現れた。
なつかしい、という思いに一気に支配される。胸の奥をなにかが駆け巡った気がして、アジェはあわてて奥歯を噛みしめた。
「ア、ジェ……？」
彼のかすれた声がした。ロナウドは色の瞳を見開き、しばし硬直する。
アジェはすこしだけ苦笑を浮かべ、さっとその場にひざまずいた。
「お久しぶりです、殿下」
思ったよりも動揺せずに言えた。自身を奮い立たせ、アジェは思い切って顔をあげる。
見目麗しい、ひとりの青年がそこにいた。青い瞳は宝石のように汚れがなく、やや儚げな顔立ちが彼の物腰の柔らかさを引き立てる。茶色の髪をひとつに緩く結っており、上品な深緑の衣を身に纏って立つ姿は、一級品の貴族そのものだ。
ちくり、と痛む胸を無視して、アジェはわざとほほえみらしいものを浮かべた。
「あ……アジェ！　本当に君なのか？」
半ば呆然としていたロナウド王子だったが、ハッと我にかえると興奮気味に声をもらす。そこには喜色以外のなにものもなく、本当

に純粋にアジェとの再会をよろこんでいるのが手に取るようにわかった。
アジェも普段は動かない表情の筋肉がかすかに動いたのを感じた。今、自分はうれしいのだと他人事のように思う。
大勢の足音がしたのに、現れたのはロナウド王子ひとり。エダはそっと気配を消して身を隠している。
ふ、と息をはく。向き合う覚悟を決めて。
ロナウドを見つめたまま、アジェは眠るラシルの顔を見えるよう引き寄せた。
次の瞬間、がらりとロナウドの表情が変わった。彼の視線の先を追えば、横たわる少女の姿。
「ラシルっ！」
すぐさま駆け寄りロナウドは少女の肩を抱き寄せる。
「大丈夫です。気を失っているだけですから」
アジェも隣へ腰を下ろしとりあえず状況の説明をする。ディオンやカトリーナたちとの戦闘のことは省いて、ただ偶然見つけたラシルを保護したということにした。それから逆に、どうして彼女が城を抜け出したのかを尋ねる。
「アジェ……君がラシルを見つけてくれたんだね？　ありがとう」
「いえ……わたしは、なにも」
ロナウドは質問には答えず、思いつめたように眉根を寄せ、それでもラシルの無事に安堵の息をこぼした。礼を言われたが、中途半端にアリス王女の力を与えてしまったことでラシルは不安定になったのだ。むしろこちらが謝らなければなるまい、とアジェは奥歯を噛む。
それに王様のこともある。いつまでも黙ってはいられない。
「殿下、あの……」
「アジェ、父が死んだんだ」
アジェが口をひらくのとほぼ同時にぼそりとロナウドが言った。
「臣下の話では獣人を捕まえ奴隷にしようとしたらしい……ばかな

ことを」
アジェは目を見張る。ロナウドの青い瞳には怒りや悲しみよりも哀れみがありありと浮かんでいたのだ。
「殿下は……その獣人を恨んではいないのですか」
「恨む？　なぜ」
半ば自嘲的にロナウドは吐き捨てる。
「父は狂ってた。力ばかりを求め、ラシルを苦しめようとしていたし、君にだって酷を強いていただろう？」
今度は悔恨の色が浮かんだ瞳でロナウドに見つめられ、アジェはたじろぐ。助けてあげられなくてごめん、と悲痛につぶやく彼に、こちらが申し訳なくなるくらいだ。
「わたしは、殿下がそばにいてくれたから苦しいことはありませんでした。だから気にしないでください」
もとより感情の起伏のすくない自分だ。ロナウドが気にすることなどなにもない。
「今度は彼女のそばにいて、幸せになってください」
ラシルを見やってそう言えば、彼女を抱くロナウドの腕に力がこもった。
「もう城には戻りたくないのか……？」
青いきれいな瞳がまっすぐにこちらを見た。一瞬だけ揺さぶられたような気がする。
だけど。
「おねーさんは僕と一緒にくるのー」
口をあけたちょうどそのとき、見計らったかのように間の抜けた声がした。エダだ。
今まで木々の一部のように気配を消していたから、唐突に現れたように見えただろう。ロナウドはぎょっと目を見開いている。
「君は……？」
「彼はわたしとともに旅をしている者です」
今度はアジェが口をひらく。どうやら王を殺した獣人の顔をロナ

ウドは知らないらしい。なにか考えるよりも先に、アジェの口は勝手に動いていた。
「そうそう。僕らふたりで仲良く旅をつづけたいの。だからぁ、アンタは邪魔しないでよねー」
ツンとして言う少年に、ロナウドは苦笑を浮かべ、「わかったよ」と承諾した。あからさまなこども扱いに、エダがむっとして頬を膨らませた、そのとき。
ふいに身震いして、ラシルが目を覚ました。
瞬間、悲鳴をあげる。
「い、いやあー！」
突然のことで、ロナウドもアジェも目を見開いて固まるが、エダはちがった。すっと泣き叫ぶ少女の額に手をかざしたかと思うと、にっこりとほほえむ。
「大丈夫。ほら、目の前を見てごらん？　君を害する人じゃないでしょ」
声はひどくやさしい。誘われるまま、ラシルは悲鳴を呑み込み、そっと辺りを見回す。
「どうして城を抜け出したの？」
ぼんやりとしたラシルの瞳から、ぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。まるで術にかかったかのように、彼女はしゃべり出す。
「あ、謝りたかった……わ、わたくしが……わたしが、幸せを奪ったから……」
「幸せを奪ったの？」
穏やかなやさしい声のままエダは問う。こくり、とラシルの首が縦に振られた。
「醜い、嫉妬だった……そんなに高貴な身分じゃないわたしが……本物のアリス王女に、敵うはずないもの」
語られるラシルの声は素直で、アジェもロナウドも微動だにせず耳を傾ける。
「で、も、あきらめられなかった……だって、本当に愛しているん

だもの……！　失いたくない！」
　唐突に、少女の瞳にめらりと炎が宿る。ブロンドの髪を振りまわし、激しく声を荒らげた。
「彼女がいる限り、わたしは彼女の代わりでしかない！　羨ましい……彼の隣にいることが当然だという証が欲しい……だれにも渡したくないの！」
　だけど、とラシルは再び静かな声音で話し出す。
「力は、いいものではなかったわ……『アリス王女』になったって、結局わたしは『わたし』でしかなかった。だから謝りたかったの。居場所を奪ったわたしを、許してくれるなら」
　ぽろぽろ、ぽろぽろ、涙を流す少女に、アジェは言葉を失った。たぶん、勘違いでないなら、彼女はアジェに謝るために城を抜け出してきたのだ。そして今なお、ロナウドを想うあまり嫉妬に苦しんでいる。
　結局、彼女に力を与えて自己満足していただけなのだ。
　ラシルの腕をとり、アジェは彼女と視線をあわせた。おぼろげに揺れていたラシルの瞳が、徐々に定まりコバルトブルーの瞳をとらえ、見開かれる。
「ラシル、すまない。わたしはあなたを苦しめた」
「ア、アリス王女……さま……」
　いいや、と首を振る。
「わたしはもうアリス王女を辞めるんだ。けれど、あなたもアリス王女であろうとする必要はなかったんだ」
　ぐ、と握る腕に力を込める。
「あなたは謝る必要がないよ。結果的にわたしは自由を手にし、今幸せなんだから。たぶん、城で過ごすよりずっと快適に生きているよ」
　普段のアジェには見られぬほど柔らかい表情で語る。伝えたかったから。
「ロナウド殿下はあなたを愛しているよ。彼はあなたが『アリス王

女』であろうとなかろうと、愛しているよ」
「そんな……嘘よ」
「嘘じゃないよ」
力強い声で、今度はロナウドが口をひらいた。アジェと視線をあわせて頷くと、そっとラシルの手を握る。
「僕の心を乱すのも、よろこばせるのも、君だけだ。ずっとそばにいてほしいんだ……ラシル」
青い瞳がまっすぐに少女へ向けられた。
彼の言葉が本物であると、アジェにはわかっていた。
いつも穏やかでやさしいロナウド。けれど、ラシルのことを話すときは顔がこれでもかとばかりにほころぶし、声には隠せない明るい色が浮かぶ。彼女を見つめる瞳は、いつにも増してきらきらとしているのだ。そして同時に、その青い瞳に揺らめく情熱的な感情も、うらやましいほどはっきりしている。
アジェは目を細めた。たぶん、今までいちばん『人間らしい表情』をしていることだろう。

そっと、そっと足を後退させる。静かに、気配を消して、ふたりから離れる。
くるりと踵をかえす。隣でエダがくすりと笑うのを感じた。

＋　＋　＋

その後、抱きしめ合うふたりの男女を捜索隊が発見し、めでたく城へと帰還した。
ロナウドが王位を継ぎ、ラシルという少女とめでたく結ばれるの

は近い未来の話。ロナウド新国王の発表で『アリス王女』は守り神という形で存在し、神殿を建ててまつられるようになるのも、そう遠くない未来の話。

夕暮れ、少年が琥珀色の瞳を細めて言った言葉を、アジェは感慨深げに思い返す。

「おねーさんの初恋はさ、ロナウド王子だったんだね」

そうか、と納得した。あれは恋だったのか、と。

そして、ヒトのように恋をできた自分に驚き、すこしだけうれしくなったのは秘密だ。

「じゃ、行こっか」

にっこりと笑みを浮かべて手を差し出す少年。きょとんと首を傾げたアジェの手を、彼は仕方ないなと肩をすくめて強引に握った。

「それでさ、アジェ？」

「なんだ」

エダは、コバルトブルーの瞳を心行くまでながめてから口をひらいた。

「本当の名前は、なんてゆうの？」

一瞬言葉をつまらせたが、すぐにアジェは答えた。彼になら、教えたいと思ったから。

「アンジェイーリア」

道行くふたつの影が伸びていく。行き先は未定。それでも、ふたりの道ははじまったばかりだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7512m/

女神のティア

2011年10月2日03時30分発行